

日本の大学生を対象とした入門期の翻訳指導について ——理論と実践とを結びつけるための ストラテジーに関する考察

Teaching Translation to Japanese University Students in the Introductory Phase : A Study of Strategies for Linking Theory and Practice

田中深雪
Miyuki TANAKA

はじめに

翻訳の歴史は古く、紀元前までさかのぼることができる。歴史上、人類が書記文字を用いるようになった頃、翻訳も生まれたと考えられている (Delisle & Woodsworth 2012)。その後、西洋では聖書の翻訳などを通して、また中国では仏典の翻訳を通して脈々と進化し続けてきた。しかし翻訳は社会のあらゆる場面で大きな役割を果たしてきたにもかかわらず、長年、実務的な分野の一つに過ぎないと思われてきた。

翻訳が学問的分野として認識されるようになったのは比較的最近で、20 世紀も終わり頃になってからである。翻訳に関わるさまざまなトピックスの分類が進み、現在は翻訳学 (トランスレーション・スタディーズ = Translation Studies) として、世界各地で学際的な研究が進められている。翻訳学は基礎的な研究と応用研究に分けて考えることができ、前者は翻訳を説明する理論の確立と、翻訳が実際どのようなようになされ、起点テキスト (source text 以後 ST と表記) と目的テキスト (target text 以後 TT と表記) の関係がどうなっているかなどを取り扱う。一方、後者の応用研究には、翻訳者のトレーニングや翻訳ツールの開発、翻訳の批評などが含まれる (Toury 2012)。

翻訳学の進展に連れて 1980 年代からは指導法に関する研究も発展を遂げた。すでに 2014 年度の調査で 71 か国に 534 もの翻訳を指導する学校や施設があることが報告されている (Yan, Pan, Wang, 2017)。このような機関は、英国や欧州各国などが中心となって発展してきたが、近年は中国、韓国など東アジア各国でも大学院など高等教育機関で翻訳を指

導するところが増えてきている。日本においても、過去に実施された「大学・大学院における翻訳教育の実態に関する調査」によれば、180 校を越す大学や大学院で多様な内容の翻訳関連科目が開講されており、また対象となる課程も学部生向けの入門レベルから博士後期課程の研究指導科目にまで及んでいる（長沼 2008）。とは言え、そこでどのような授業が展開され、いかなる効果を得ているのかといった点については、実践報告の数も限られており、その実態についての把握は難しい。また各大学で翻訳理論が指導されているのか否かについては明確な情報はない。日本の場合、大学生の語学習熟度に違いがあるため、翻訳の授業のレベルがどうなっているのか不明な点が残る。

筆者が在籍する青山学院大学文学部英米文学科においては、これまで長年に渡って翻訳の授業を継続して実施してきた（田中 2018）。本稿では、本校における翻訳の授業の取り組みを例に、大学における入門期の翻訳指導に関して論じる。なかでも翻訳理論と実践とを結びつけるためのストラテジーについて考えていきたい。

1. 青山学院大学での翻訳科目

青山学院大学文学部英米文学科には通訳・翻訳プログラムがあり、翻訳科目として 20 単位を用意している。指導内容は「実務翻訳」、「文芸翻訳」、「映像翻訳」の分野を網羅しており、専任教員と翻訳者としての実務経験を持つ教員が指導にあたっている。またその他にも各種講義科目やゼミの授業などでも翻訳を取り扱っており、年間を通じて多くの受講生たちが学んでいる。ほとんどの授業は 3 年、4 年生を対象としているが、一部、1 年時でも履修可能な授業もある。本稿では、その中から翻訳初学者を対象とした基礎クラス、およびその次の段階に達した学生たちを対象としたゼミクラスでの指導内容を中心に扱う。

わが国では文部科学省の指針に基づいて、かなり以前から外国語を「読む」「聞く」「話す」「書く」という 4 技能をすべて網羅的に学ぶことが強く推奨されてきている（注 1）。そのおかげで、日本の中学や高校で学んだ学生は英語を「書く」ことは一通り習得済みである。しかし翻訳については系統立てて学ぶ機会がないため、例外的に高校で学んだ経験がある学生を除けば、ほとんどが大学で初めて学ぶこととなる。本学科の場合、翻訳への関心は概して高く、学習へのモチベーションも高い。しかしそうであっても実際に訳させると、日本語を英語に置き換えただけの訳や、日本語に引きずられ過ぎて英語では意味が通らない訳など、学生たちがかなり手古摺っているのが明らかになる。

翻訳に初めて取り組む学生の多くは、「訳す」とは忠実にオリジナルの言語を他の言語に置き換えていく作業であると考えている。少しでもオリジナルから外れた訳語を用いたり、意訳したりすると減点の対象とされてしまうのではないかと警戒している。そのため翻訳で

は訳出する際に構文を変えたり、単語を加えたり削除したり、場合によっては置き換えることすらありうるのだと知ると戸惑いを覚える。翻訳は単なる言語の置き換えではなく、著者が伝えたいメッセージを汲み取り、目的言語（**target language** 以後 **TL** と表記）で読む人が理解できるように訳していくことが重要だと伝えても、中学、高校での英作文の体験から抜けきるのは容易ではない。

一方、本学科では海外で英語を学んできたいわゆる帰国生や、英語圏の国籍を持つ学生たちが多く在籍している。このような学生たちは総じて英語の習熟度が高く、文法力、構文についての知識、ライティングの基礎などの力が備わっている者が多い。しかしそのような学生たちの中には、日本語で書かれた原作を丁寧に読み取り、筆者が伝えようとしている「言外」のメッセージを解釈するという作業に戸惑う者が多い。原文に書かれていないことをどうしたら理解できるのか。確かに難しい問題であるが、それができないと日英の翻訳はできない。そのため、別途、日本語の原作の作品分析を交えながら指導する必要に迫られる。

さらに翻訳の指導を困難にしているのは、近年における機械翻訳（**machine translation** 以後 **MT** と表記）の著しい進歩である。誰でもが無料で簡単に利用できる時代である。そのため辞書を使いながら自分で少しずつ訳すような手間は省いて、翻訳サイトに全面的に頼ってしまう者もいる。情報化時代の趨勢から、もはや **MT** を使うことを禁止することもできない。しかし頼り過ぎてしまうと自力で訳す力はつかない。また **MT** で誤訳が生じることがあっても、それがおかしいと気が付くこともない。

このように入門期の翻訳クラスは取り組むべき課題が多いのが特徴である。大学の授業ではこのような点を踏まえながら、指導することが必要になってくる。その際に指針として利用すべきは翻訳理論のほうである。講義ではその基礎を教示し、基本的な理論を使いこなせるように指導を重ねる。しかし問題もある。翻訳理論と実践が（用語の難解さも相俟って）少なからず乖離しているため、学生たちは頭では理解できても、自分たちが翻訳する上でどう生きてくるのかが直ぐには結びつかない。苦勞して学んだ理論であっても、絵にかいた餅になってしまいがちである。理論と実践との間を埋めるため、何らかの方策が必要である。そこで一つの手段として、ここ数年は翻訳分析を用いたアプローチを導入してきた。このような学習経験を通して、翻訳理論を頭の中にだけある知識として置いておくのではなく、反射的に使いこなすレベルまで持っていくことを目指した。では詳細について論じる前に、そのような理論を指導する意義はどこにあるのか、代表的な先行研究をたどってみる。

2. 翻訳理論を指導する意義

2.1 Gile による論考

翻訳の理論を指導することにどのような意義があるのか、主たる先行研究を参照しながら考察する。まずは“potential benefits of theoretical components in interpreter and translator training”（通訳者翻訳者訓練における理論的要素の主たる有効性）について述べた Gile (2009 p.16-18) の論考を見てみる。Gile は理論の持つ“explanatory power”（説明能力）を示して、理論は不安や困難を経験している学習者たちが「起こっている現象を理解できる」、「翻訳の難しさを理解できる」そして「指導者たちが勧めた翻訳の方略と対処の仕方を理解できる」といった点で貢献できると述べている。そのうえで理論的要素が含まれる訓練プログラムに参加することによって、受講生たちが得る可能性があるメリットとして次の点をあげている。

They may be able to advance faster and further ~ .

（より早く高いレベルまで上達できる可能性がある）

Theoretical concepts and models can help them choose appropriate strategies and tactics when they are faced with new situations ~ .

（理論的な概念やモデルは新たな状況に直面した時に適切な方略と対処法を選択する助けとなる）

Theoretical concepts and models can help them maintain appropriate strategies and tactics.

（理論的な概念やモデルは適切な方略や対処法を維持する助けとなり得る）

（一部抜粋、訳は筆者）

このように Gile は翻訳理論を学習者に指導することによって、これから翻訳に取り組むにあたって必要な知見を得る手助けとなるとして、指導の意義とメリットを肯定的に論じている。

2.2 Pym による論考

次に Pym (2014 p.4-5) の論考を見てみる。Pym はまず、翻訳理論を学んだ者の方が、そうでない者よりも優れていると指導者たちは考えてしまうことがあるが、それが事実であると裏付ける証拠はないと警鐘を鳴らしている。しかしながら翻訳の理論を学ぶ意義として

日本の大学生を対象とした入門期の翻訳指導について——理論と実践とを結びつけるためのストラテジーに関する考察 5
利点を列挙している。その中から一部を紹介する。

... awareness of different theories might be of practical benefit when confronting problems for which there are no established solutions, where significant creativity is required.

(確立された解決策がなく、創造性が大いに必要とされる問題に直面したとき、異なる理論を意識することは、実用的な利点となるかもしれない)

... When arguments occur, theories provide translators with valuable tools, not just to defend their positions but also to find out about other positions

(議論が起こったとき、理論は翻訳者に自分の立場を守るだけでなく、他の立場を知るための貴重なツールを提供してくれる)

... theories can also provide a range of reasons for choosing one solution and discarding the rest, as well as defending that solution when necessary

(理論は一つの解決策を選択し、他の解決策を放棄するための様々な理由を提供し、必要な場合にはその解決策を擁護してくれる) (一部抜粋、訳は筆者)

このように、Pym (2014) も翻訳理論を指導することのメリットを多く述べている。またここに上げた例の他にも阪本 (2013 p.48) は、翻訳者の教育プログラムで翻訳理論を教えるべきだという意見は、欧米の研究者の間では主流となっていると述べている。

2.3 Cintrão による論考

Cintrão (2010 p.178-179) は入門期における翻訳理論の役割について、関連性がないとする否定的な意見も多数あるものの、自分は“positive impact” (良い効果) をもたらすと考えていると述べ、その理由として以下をあげている。

... explicit presentation of concepts and principles in the initial stages of learning can work as a ‘magnifying glass’ lending visibility to the fundamental mechanisms of translation

(学習の初期段階で概念や原理を明示的に提示することは、翻訳の基本的なメカニズムを可視化する「拡大鏡」として機能する)

その結果、入門期の学習者は何が問題で、どう対応しなければならないかということにつ

いて、自ら解決策を見出すための手がかりを得ることができる可能性がある」と指摘する。

... the explicit presentation of theoretical concepts and principles relevant “to the skill” seems to be capable of qualitatively modifying, quite quickly, the ability to detect problems and apply strategies for resolving problems

（「技能」に関連する理論的な概念や原理を明示的に提示することは、問題を発見する能力と問題解決のための戦略を適用する能力を、極めて速く質的に変化させることができるようである）
（一部抜粋、訳は筆者）

結論として Cintrão は、入門期に翻訳理論を指導の中に取り入れることを強く肯定している。しかしこれまで紹介した一連の論考は、主に英語とフランス語やスペイン語など西洋諸国間の言語での翻訳について論じられたものである点に注意が必要である。英語と日本語のように言語間の距離が大きい場合は、言語構造の違いや文化の違いといった問題が翻訳に際して大きな障壁となりがちであり、特に文化的な要素への対応が求められる。

2.4 Gonzalez-Davies and Scott-Tennent による論考

では文化的な要素の翻訳能力を身につけるためには、どのように指導すれば良いのであろうか。この点について Gonzalez-Davies and Scott-Tennent (2005) は翻訳教育の指導指針から考慮していく必要があるとして “task based learning”（タスク型の学習）や “project-based learning”（プロジェクト型の学習）を推奨している。換言するならば教員が学生にすべての指示を与えて指導するのではなく、学生主体でどのような点が翻訳困難であるのか自らが問題を見出し、これまで学んだ翻訳のスキルのどれを援用すべきか判断させるという方法である。Gonzalez-Davies and Scott-Tennent はこのような学習方法によって翻訳理論の知識が “automized”（自動化）できるようになることを目指し、そのために必要な指導として次の点を提言している。

1. Language work: constant acquisition and improvement of the source language/s and target languages …

（言語活動：起点言語と目的言語の絶え間ない習得と向上が必要）

2. Encyclopedic knowledge: introduction to subject matters related to different disciplines, cultural knowledge …

（豊富な知識：異なる分野や文化的知識に関する主題の導入が必要）

3. Transference skills: problem-spotting and problem-solving, creativity and self-confidence as translators, awareness, and use of strategies and procedures...

(転移能力：問題発見と問題解決、翻訳者としての創造性と自信、戦略や手順を認識して使用できること)
(一部抜粋、訳は筆者)

その上で文化的な要素が色濃く反映されている作品に関しては Nida (1964) (注 2) による文化的な参照点に基づいて、食べ物、飲み物、ゲーム、度量衡、地名、動植物、社会、芸術、政治、歴史、余暇、宗教などの分野に分けて分析していくことを目指すとしている。本稿では日本語の特徴を勘案したうえで、この提案の一部を援用して導入を試みた例を紹介する。

3. 翻訳理論の導入の試み

3.1 童話の比較と分析

これまでの論考を踏まえながら、どのような指導が可能なのか、指導例を交えながら考えていく。学習者の翻訳の習熟度に応じて異なったアプローチが必要であることから、まず初めは翻訳初心者を対象とした授業での取り組みについて紹介する。ここで実施した主な点は以下の通りである。

- (1) 基礎的な翻訳理論の紹介 (講義形式)
- (2) 日本語の童話と英語の訳本の比較と分析 (アクティビティ形式)

ここでは教材に著名な童話作家の新美南吉 (1913 ~ 1943) が 1932 年に著した「ごんぎつね」を用いた。作品が英語に翻訳された時、オリジナルと訳本との間にどのような違いが生じているのか、変化しているもの、喪失してしまっているもの、あるいは付け加えられているものなどについて様々な視点からアプローチすることをアクティビティとして課した。中でも特に注意を促したのは、日英への翻訳の際、障壁となりがちな「文化的な要素」がどう訳されているのかといった点である。日本固有の文化的な要素が作品に色濃く投影されている本作の場合、英語への翻訳には困難が伴う。そこで翻訳者がどのようなストラテジーを取ったのか、学生たちの気付きを促すことを目指した。Baker (1992 p.24) は、SL で使われている文化的な語彙の中で TL では全く知られていないものを “culture-specific items” と呼んだ。また Nohara (2018 p.103) は “popular fiction” (大衆小説) のテキスト分析の一

つとして“**Cultural Domestication**”（文化的受容化）と“**Cultural Foreignization**”（文化的異質化）を指標として用いている。起点言語に寄り添う形でオリジナルを重視しながら訳されているのか、それとも目的言語の方を重視して訳を読む人々が戸惑うことがないように訳を変化させているのか。訳をどの程度変化させるのかは個々の翻訳者の判断に委ねられる。アクティビティでは、学生たちに作品中のどれがその語句に相応するのか、できるだけ多く見つけるように指示した。

「ごんぎつね」は、日本では小学校の国語の教科書に長年掲載され続けていることもあり（府川 2000）作品の好き嫌いは別として多くの日本人に馴染みがある。5千文字前後と比較的短く、また「ひらがな」が多く使われている。美しい挿絵がふんだんに使われている絵本版もあり、難解な作品といったイメージは持ちにくい。そのため、訳も簡単にできるのではないかと思われがちである。ところが実際に本作を英語に訳してみようとする、そう簡単には訳せないことに気が付く。なぜ翻訳が難しいのか、その理由を探るべく原作と英語の翻訳版のテキストの分析をさせた。

一連の授業での取り組みを通して、作品の特徴に関して多くの発見があった。学生たちが指摘した点は多岐に渡っていたが、まずは作品の時代設定について関心が集まった。江戸時代のものであるものの、文中には明確には示されていない。ただ、「小さなお城」「中山さまというおとのさま」（新美 2017 p.8）とあるところから推測できる。また舞台は、日本のある地方の農村らしいがどこかは分からない。さらに当時の人々の暮らしぶりや風習などが細かく描かれている。日本語の童話やアニメに多用されている「オノマトペ」がたくさん出てくる点なども注目を集めた。

そこでより精緻に翻訳テキストの分析をさせるため“**culture-specific items**”に着目させながら実施した。また下記に示すように補足的説明があった方が分かりやすいと思う箇所、自分が考えた英訳と翻訳版の違い、擬音語や擬態語などオノマトペの訳について、さらには日本語特有の役割語が英語でどう訳されているのかなど、総合的な見地から作品を分析するように指示した。

1. 作品の中から“**culture-specific items**”を見つけ、どう英訳されているか調べる。
固有名詞、食べ物、場所・土地の名、服装、習慣などに注目すること。
2. “**culture-specific items**”の訳で、英語での補足説明があった方が良いと思う箇所を指摘する。自分が説明するとしたら、どのようにするか。
3. 自分の訳と違った箇所があれば指摘する。なぜそう思うのか理由を明確に。

4. 擬音語、擬態語がどう訳されているのかを調べる。

5. 役割語と思われる箇所と、その英訳の箇所がどうなっているかを検証する。

3.2 “Culture-specific items”

学生たちが比較分析を通して気が付いたのは、原作にはたくさんの“culture-specific items”が使われているものの、翻訳では TL の読者にわかるように同化的な訳がなされており、いたるところに翻訳者が工夫を凝らしているといった点であった。また中にはなぜそのような訳になったのか少し理解できないものや、文化的な違いから仕方がないとは言え、語句の置き換えが行われた時、伝わるイメージが異なってしまう箇所、それに何らかの補足的な説明があった方が良かったのではと思える箇所などもあった。以下、代表的な箇所を紹介していく。

(食物)

芋を掘り (新美 2017 p.8) → dig up yams (Niimi 1969 p.2)

日本で芋と言えば「じゃがいも」ではないだろうか？なぜ“yam” (サツマイモ、山芋) に置き換えられているのかわからない。

(服装)

よそいきの着物で (新美 2017 p.13) → in formal clothes (Niimi 1969 p.11)

村の人々が葬式に参列するため喪服 (着物) を身に着けているのではないかと思われるが、このように着物が「clothes= 服」と訳されてしまうと和装であるということが伝わらないのでは？

こしに手ぬぐいをさげた (新美 2017 p.13) → towels hanging from their belts (Niimi 1969 p.11)

着物の帯に手ぬぐいを差し込んでいるという姿を思い起こす。訳は正しいのだが、洋服のベルトにタオル (ふかふかしている) がぶらさがっているというイメージが頭に浮かんでしまう。

(習慣)

おはぐろをつけていました (新美 2017 p.12) → **blackening her teeth** (Niimi 1969 p.10)

現代では日本では女性が「歯を黒く染める」という習慣はないので、原作を読んで奇異に感じた。訳はそのまま英訳されているので、TLで読む外国の児童はいつそうわからないのではと思う。なぜ黒くするのか注釈があった方が良いと思う。

(固有名詞)

六地藏さん (新美 2017 p.13) → **six Buddha statues** (Niimi 1969 p.12)

地藏はこどもを守る神様 (**guardian deity of children**) で、人々にとって親しみやすい存在で丸顔である。それを海外でも知られている「仏像」と訳すことで訳の平準化を図っているのはわかるけれども、違和感がある。

(形容詞)

赤い井戸 (新美 2017 p.15) → **red well** (Niimi 1969 p. 16)

兵十の家にある「赤い井戸」は字面の通り “**red well**” と訳されていることに違和感を覚えることなく読み飛ばしてしまった。しかし先生から日本の農家の井戸は赤かったのかと尋ねられて調べたら、この井戸は作者が住んでいた地域固有のもので、陶器でできており、本当は “**brick-red**” と訳した方がより近いのではと思った。

ここで紹介したのはほんの数例であるが、学生たちが多くの例を見つけてきたのが印象に残った。“**culture-specific items**” について比較調査をすることは、日本語母語話者である学生にとって難易度は高くない。その英訳が適切であるかどうか、自ら調査した結果をクラスメートや教員とディスカッションをすることで、文化の違いについて深く考える機会ともなる。またこのように少しでも気になった箇所があったら、丁寧に調べていくというのは翻訳者にとって必須の事項である。翻訳入門者にとって比較的取り組みやすく、理論へのハードルを低くする試みとなった。

3.3 オノマトペ

次に擬音語や擬態語 (オノマトペ) の翻訳の問題について論じる。オノマトペとは、さまざまな状態や動きなどを音で表現した言葉を指し、おもに自然界にある音や声など、現実

聞こえる音を人の言語で表現した言葉である。言語学的には細かい分類はあるものの、主に擬音語と擬態語に分類されることが多い。擬音語は音を描写した「ニャーニャー」「ワンワン」などを指し、擬態語は「キョロキョロ」「ガーン」など実際に音はしていないが、言語によって状態や動作などを表現しているものを指す。

日本語にはオノマトペが多く存在することが知られており（秋田 2017 p.68）、特に児童向け作品や漫画などでは多く使われる傾向がある。ごんぎつねも要所でオノマトペが使われており、物語を生き生きとしてくれる。しかしながら英語には、置換できるようなオノマトペが少ない、あるいはもともと訳語が存在しないなどの理由から、翻訳は難しい作業となる。では実際どのように訳されているのか。学生たちが指摘した代表的な例を擬音語と擬態語に分けて紹介する。

（擬音語の例）

もずの音がきんきん、ひびいていました （新美 2017 p.9）

the squeaking voice of a shrike echoed in the air (Niimi 1969 p.4)

一般的に、百舌鳥は「キィ、キィ、キッ、キッ、キチキチ」など甲高い声で鳴くことで知られている。この様子を南吉は「きんきん」と表現している。一方、翻訳者は“squeak”と訳している。これは（人や動物の）キーキー声や音をあらわす語であり、適切な訳と思う。とは言え、“squeak”は物がこすれる時に生じる雑音など、人間にとって不快感をもたらす音も表すため、TLの読者にとっては、より強く耳障りな鳴き声としての印象が残りそうな気がした。

チンチロリン、チンチロリンとまつむしがなくて（新美 2017 p.17）

A pine cricket was making its chirping sound. (Niimi 1969 p.25)

日本で有名な文部省唱歌「虫の声（1912）」の中では、マツムシが「チンチロリン」と鳴いている。しかし実際は必ずしもマツムシはこのようには鳴かない。これはかなりデフォルメされた鳴き声であり、実際は「チッチリリッ」、「ティッティリリッ」、「ピッピリリッ」など鋭い音で鳴いている。翻訳者は“chirp”という語を使って表現しているが、これは（鳥や虫の甲高い）鳴き声をあらわすので、こちらの方がより正確に伝えている。ただチンチロリンという音をもたらす、可愛らしさが消えてしまうのは仕方がないのだろうか。

ポンポンポンポンと木魚の音 (新美 2017 p.19)

The “bong” sound of a wooden temple block (Niimi 1969 p.29)

木魚は空洞なので「ポン」と空気が抜ける音がする。翻訳者はこれを“bong”と訳しているが、少し重々しくないだろうか。またポンポンポンポンという音の繰り返しも消えているので、たたき続ける木魚の軽妙なリズム感とは異なっている。

(擬態語の例)

ごんがびょいと草のなかからとびだして (新美 2017 p.10)

Gon jumped out of the grass (Niimi 1969 p.9)

確かに「とびだす」は“jump out”なのだが、この場合は小柄なごんぎつねの軽い身のこなしをより正確に描写して“popped out”と訳した方が「びょい」という日本語のオノマトペの表現に近づくと私は思った。

ぼんぼんなげ混みました (新美 2017 p.10)

tossed them back one by one (Niimi 1969 p.9)

英訳では「一つ一つもとの場所に投げ入れ戻した」となっている。次々と勢いよく魚を投げ入れる「ぼんぼん」という音のリズムは消える。

なにかぐつぐつにえていました (新美 2017 p.13)

Something was boiling (Niimi 1969 p.11)

boil では沸騰するとか茹で上がる様子のように思える。微妙だが、ここは葬式の際に参列者にふるまう料理が熱々に煮詰まった状態を指しているのではないかと思う。

ごんはばたりと倒れました (新美 2017 p.22)

Gon fell over (Niimi 1969 p.34)

作品のラストでごんが兵十に銃で撃たれて倒れる重要なシーンで使われた擬態語である。この言葉が「ばたり」ではなく「ばたり」であることから、ごんが致命傷を負ったことを読者は知る。そのため fell over (たおれる) ではごんがどうなったのか、TLの読者にはどのように伝わるのだろうか？

以上の例が示すように擬音語や擬態語についても、学生たちは多くの例を見つけてきた。また英訳との比較においては、かなり時間をかけて解説文を作成していた。残念ながら、少々の外れの答えもいくつか見受けられた。しかしこのようなアクティビティを通して、日頃、何気なく用いているオノマトペを英語に訳すことがどんなに難しいかといった点を体得させることはできた。オノマトペは、物語の舞台背景を表出したり、個々の登場人物の動きに彩を与えたりしている。今井（2017 p.118）によると、

オノマトペはまた、文化を肌で感じる媒体でもある。言語は文化に根差したものであり、それぞれの文化で大事にすること、価値観に深くかかわっている。子どもはオノマトペを覚えながら、何世代にもわたって蓄積した日本語の感覚、その背景にある日本の文化を身体感覚として自分の中に蓄えていくのである。

文化と深い関わり合いを持つオノマトペを英語に訳す場合、本来原文にあった要素が同化的翻訳で置換され、または削除されたり、違う意味になっていたりする。このような点を翻訳の比較分析を通して客観視していくことは、翻訳理論だけでなく、言語間コミュニケーションの視点から考えても重要な点である。

3.4 作品の受容度

一連のアクティビティの後、学生たちに本作品の受容度について調査させた。この作品が日本と英語圏の人々の間でどのように受け止められているのかを探るため、原文や翻訳の読後感想や書評を集めて対比させてみた。その結果、かなり違った受け止められ方をしていることが明らかになった。オリジナルを読んだ日本人による読後感想文をアトランダムに抽出し、テキストマイニングツール（注3）を使って語句の出現回数を調べたところ、出現率が高かった語は次の通りである。

名詞： 好き、名作、優しさ、号泣、ラスト、小学生、感動など

動詞： 気に入る、残る、感じる、考える、役に立つ、伝わる、泣くなど

形容詞： いい、美しい、かなしい、懐かしい、可愛らしい、やさしい、温かいなど

もちろんこれは一部の感想でしかないという前提のもとの議論になるが、ここまで好意的な言葉が目立ったのは少し予想外であった。日本では長年に渡ってこの作品が小学校の国語の教科書に掲載されていることもあり、熱烈なファンも多いということが影響しているのかもしれない。

では具体的に、この作品のどのような点が好まれているのだろうか。鶴田（2020 p.42）

は、新美南吉の童話は、起承転結が明確で、ストーリー性に富んでおり、読者を物語の世界に引き込んでいく仕掛けが見事であると述べている。実際、自然描写が巧みで、抒情性豊かな作品が多い。ここで作品に戻ってみると、ごんぎつねには自然や人々の暮らしなどが細かに描かれており、あたかも自分がその現場にいるような錯覚を覚えるほどである。また擬音語・擬態語が多く使われており、子どもも大人もすんなりと作品に引き込まれていく。

一方、この作品のテーマとも言えるごんと兵十の心の触れ合いであるが、キツネと人間という相容れない世界に生きているものどうしであるはずなのに、兵十も自分と同じ孤独な身の上になってしまったことを知ったごんが、これまでのいたずらや嫌がらせを反省して、必死で心を交わそうと努め始める。そのいじましい姿や、健気さに心打たれる者も多い。そして、ごんの気持ちに兵十が気付くのは、火縄銃で撃った後であったという理不尽さに何とも言えない思いを抱きながら作品は終わる。

では英語圏におけるごんぎつねの評判はどのようなものなのか、これも学生たちに調査させたところ、日本での受け止め方とまったくと言っても良いほど異なっていた。そこで先ほどのテキストマイニングツールを使用して **Gon** の翻訳版を英語で読んだ人たちの感想を調べさせてみた。その結果、コメントの傾向としてポジティブなものは5%しかなかった。反対にネガティブな感情を持ったものは29%もあった。また作品に対して「怒り」と「悲しみ」を感じた人の方が、作品を「好き」としたよりも多く、「喜び」を感じた人はいないという結果になった。比較文化を専門とする井上（1990 p.27）は、イギリスでは「死んだ後に理解されても、すなわち兵十が痛恨の涙にくれて贖罪の一生をかりに送ったとしても、ごんは救われないと判断する」と指摘する。またギリシャの翻訳家 カチャントニ（2022）はこの童話は自分のこどもには読み聞かせたくない作品だとして、以下のように述べている。

確かにごんは悪さをたくさんしたかもしれませんが、でも、兵十に対して謝りたかった気持ちは本当です。そのような気持ちを持って行動していたにもかかわらず、撃ち殺されてしまうというのは、あまりにもひどい終わり方だと感じました。

（一部抜粋）

では、いったいなぜ作品の評価がここまで違ってくるのか。この点についても学生たちに考えさせることにした。その結果、やはり文化の違い、考え方の違い、倫理感の違いなどを指摘する意見が多かった。また英語圏では「童話には死や病気を持ち込むことがこどもの心に悪影響を及ぼす」としてあまり好まれないのではないだろうかという指摘や、「日本では可哀そうな話が好まれる」などといった感想もあった。しかしその一方で、以下のように翻訳版を読んだ場合とオリジナルを読んだ時の印象の違いを指摘する声もあった。

違いが生じた原因は登場人物の心情が英訳された時に少し消えてしまうからではないだろうか。例えばごんが兵十らの話を聞こうと思って、「かげぼうしをふみふみ」（新美 2017 p.19）いく場面がある。訳では“stepping on Hyouju's shadow from time to time”（Niimi 1969 p.30）となっていた。訳は正しいと思うが「ふみふみ」というオノマトペを通して伝わる兵十に対するごんの愛着、見つかったらとんでもないことになるかもしれないのはわかっているが兵十の話が聞きたくて仕方ない高まった気持ちは英語では薄くなる。

（大学 2 年生）

この学生は「ふみふみ」という言葉の訳を丁寧に分析して、登場人物の心の動きを読み取っている。異文化間の言葉の違いによって英訳が TL の読者に及ぼす影響までを突き詰めて考察している。

さて最後に、本クラスは翻訳初心者のためのクラスであったため、深堀できなかった点について補足しておく。それはこの作品のなかに周到に埋め込まれた「メッセージ性」についてである。新美南吉が「死」を暗示するモチーフを作品のいたるところに忍ばせていることが、翻訳では伝わり切れない印象を筆者は持った。兵十の母親の葬式の準備にかけつけた村人の様子、墓地、六地藏、ひがん花、位牌、おねんぶつなど、子ども向けの童話とは思えないほど暗いイメージを持つ言葉が散りばめられており、この話の結末を暗示しているようである。だがたとえば「ひがん花」（新美 2017 p.14）という語一つを取ってみても、日本ではこの花は別名、「葬式花」、「死人花」などと呼ばれ、死をイメージする花であるのだが、英語の訳語“spider lily”（Niimi 1969 p.12）にはそのようなイメージはなく、作者のメッセージは断ち切られる。さらに本作品は、暗いイメージを覆い隠すようにごんの思いや姿がユーモラスに描かれていく。このような明るい中にも、言外に暗さを含んだイメージが通底して描かれる作品の翻訳が困難であることは言うまでもない。また Venuti (2008)（注 4）による異化的な翻訳という手法を取って訳しても、TL の読者である児童には意図が伝わるとは思えない。やはり同化的翻訳にせざるを得ないのだろうが、それにも限界があり、忠実に訳そうと思ったら翻訳者は苦心せざるを得ない。

このように多角的な視野から原作と翻訳を比較することで、翻訳とは「ままならないもの」「一筋縄ではいかないもの」という現実を学生たちが疑似体験できた点は、一定の効果があったと考える。最後に学生たちに実際に翻訳させてみたところ、いくつもの文化的な壁にぶつかって苦労していた。しかし、アクティビティを通して学んだ知見を何とか生かそうと努力もしていた。このように翻訳分析は、「訳す」という作業に対する認識を深める大きな契機になった。では次に、少し上のレベルでのクラスでの取り組みを紹介する。

4. 翻訳作品の特性と表現比較

4.1 グループワークによる比較分析

翻訳入門の授業を学び終えた中級レベルの学生たちを対象にしたゼミクラスでの取り組みの一部を紹介する。ここは 3, 4 年生を対象としており、例年以下のことを実施している。

- (1) 翻訳理論の解説（講義形式）と理解度を確認するためのレポート作成
- (2) グループワークによる比較分析

授業では次に示す基本的な翻訳理論や役割語研究、ジェンダーと翻訳などについて予め講義を実施している。少なくとも次の点についてはある程度は理解できることを目指している。

- ・ 等価という概念について。Nida の形式的等価や動動的等価など。
- ・ 機能主義的アプローチ。Vermeer（注 5）のスコポス理論など。
- ・ Venuti の翻訳の異質化と受容化について。
- ・ 記述的翻訳研究について。
- ・ 日本語字幕翻訳における規範について。
- ・ 役割語について。
- ・ ジェンダーと翻訳について。

学生がどの程度理解できたか、その定着度を確認するため、レポートの執筆を課している。一通り理解していることを確認できたら翻訳プロジェクトに入る。このプロジェクトの主な目的は翻訳に関する知識をより身近なものにし、それを支える主な理論的概念についての理解を深めることである。実施要領は以下の通りである。

課題：言語が変わることによって消えるもの、つけ加えられるものがあります。この授業ではなぜそのようなことが生じるのか、その原因と理由まで考察してください。使用する素材は、書籍、翻訳書、動画の字幕、歌詞などいずれでも可です。

【手順】

- (1) 日本語（or 英語）で作成された作品が英語（or 日本語）に翻訳されることでどのような変化が生じるのかを見つけてください。使用する作品はグループで自由に決めて下さい。

(2) 翻訳者が取った訳出のための戦略（ストラテジー）を見つけ出すために、データを集めて、分析してください。

(3) 分析の結果、訳がそのような変化に至った理由を推察してください。なぜ ST がそのように置き換えられたのか。その置き換えや変化は TT をより良いものになっているのか、それとも台無しにしたのかなど翻訳理論を基に考察してください。

このような学生主体のリサーチをグループワーク形式で3か月間（約12回）で実施した。

4.2 学生主体のリサーチ例 (1)

ではリサーチの概要を二例紹介する。一つ目は、三浦しおん著の小説「舟を編む」(2015)の原作とその翻訳版“The Great Passage”(Miura 2017) Juliet Winters Carpenter 訳と日本語のテレビアニメの英語字幕（注 6）についてのリサーチである。この作品は出版社の営業部員である主人公が新しい辞書の作成に向かう物語である。作中には辞書編纂に関わる言葉が多く使われているだけでなく、辞書に加える言葉や表現、また登場人物たちの間で交わされる会話の内容など、英訳が難解な表現が多用されているのが特徴である。学生たちが設定したリサーチ・クエスチョンは以下の通りである。

(1) 目標言語が英語の場合、英語の持つ絶対的権威から受容化方略が取られることが多いとされているが、この作品もそうだろうか？

(2) 字幕翻訳には制限があり、簡潔な表現が求められるが、そのルールの範囲内で正確に原文の内容を伝えることができるのか？

(1) は Venuti (2008) の論考から学生たちが導き出したものである。そして仮説として、全体として海外の読者が読みやすいよう受容化翻訳が取られている一方で、日本特有の文化や概念に関しては異質化翻訳が行われているのではないかと推測している。また (2) の小説の原文とアニメの字幕の比較に関しては、字幕に使用できる文字数には制約があり、それに加えて絵の補助があるため、アニメにおける翻訳の方が小説よりも簡略化されているのではないかと推測している。リサーチでは、小説・アニメから英訳が困難と予想される言葉や表現を見つけ出し、カテゴリーに分け、それが英語の翻訳版ではどう訳されているのかを調べている。小説分析のまとめとして、全体として海外の読者が読みやすいように受容化翻訳が多くなっているが、一部の日本特有の名称や文化に関しては異質化翻訳が行われていると結論づけている。一方、アニメの字幕翻訳の分析結果では、登場人物のキャラクター性を示

す表現は字幕において削除されていること、また音声効果と合わさっているセリフやメイン以外のセリフも削除されていること、そのためアニメでは小説よりも簡略化された訳が見受けられたと報告している。

結果、(1)への結論としては、物語の大筋の部分においては受容化翻訳により海外の読者、視聴者が理解しやすい表現方法がとられていた。また日本特有の文化や表現に関しては異質化翻訳が行われている箇所が多くあり、日本らしさを感じる訳になっていた。次に(2)への結論としては、字幕の制限によってフィラーや語尾の省略など字幕表現に簡略化が見られた。また、字幕表現の限界を超える音声効果や、訳さなくても伝わるリアクションなども省略されていた。さいごにアニメの絵や音声は、字幕の補助にはならず、寧ろ字幕表現に縛りを加えていたと報告している。

4.3 学生主体の研究例 (2)

では二つ目の研究の概要を紹介する。こちらは英語の漫画作品を日本語に訳した場合の研究で、アメリカ人の漫画家 C.M. Schulz 作 “Peanuts” シリーズの分析を、「笑い」という視点に注目しながら分析を試みている。“Peanuts” シリーズは 1950 年から約半世紀に渡って描かれており、総作品数は 18,000 作近くある。日本では早くから詩人の谷川俊太郎が翻訳にあたっている。作品を分析するにあたって、リサーチ・クエスチョンを以下のように設定している。

- (1) 海外作品の笑いは翻訳可能なものと不可能なものがあると言われているが、それは “Peanuts” にも当てはまるのだろうか？
- (2) 翻訳不可能なものや、起点言語文化圏以外の人には意味が伝わりにくいものには、どのような工夫がなされているのであろうか。

そして仮説として、(1)については “Peanuts” の漫画作品についても当てはまるとして、文化的な側面から伝わらないこと、言語的な側面から伝わらないことがある点を理由にあげている。また(2)については、翻訳不可能なものは同化的な訳出がされているのではないかと推測している。リサーチでは、これまで日本語に訳出された “Snoopy Comic Selection” (Shultz 2015) のなかから、中野 (2002) の論考に基づき、翻訳が可能な英語のジョークと翻訳が不可能なものに分類している。前者は翻訳してもジョークが伝わる、または一部の人には通じるものを選択し、後者では翻訳するとジョークではなくなる、または誰にもジョークであったことが伝わらなくなるものを選択している。

調査の結果、(1)は “Peanuts” にも当てはまることが判明したと述べている。一方、(2)

日本の大学生を対象とした入門期の翻訳指導について——理論と実践とを結びつけるためのストラテジーに関する考察 19

については、たとえ一見すると翻訳不可能と見えるジョークであっても、翻訳者による言葉遊びが独自に成立しているような例もあり、一概に同化的な翻訳がなされているとは言えないことが分かったと述べている。

4.4 学生のレポートから

本プロジェクトの終わりに実施したアンケート調査によると、自分たちが分析するための指針やツールとして翻訳理論を使用することに対する抵抗が減った点をあげていた者が多かった。最後にこのプロジェクトに参加したゼミクラスのメンバーの感想を英文レポートから一部紹介する。(和訳は筆者)

We created the standards from the ground, so we tried and failed many times. Through working on this study, I emphasized consistency so much. We built up two hypotheses, so I thought the contents and conclusion would be logical and correct against those hypotheses. Sometimes I came close to losing the goal, so I always tried to keep the central point in my mind.

私たちは一から基準を作ったので、何度も挑戦し、失敗もしました。この研究を通して、私は一貫性をとても重視しました。グループで2つの仮説を立てたので、その仮説に対して内容や結論が論理的に正しくなければと思いました。目標を見失いそうになることもあったので、常に最も大事なことを見失わないように心がけました。(4年生リーダー)

This time, our group continued trials and errors to make the research consistent, analyzing translated words one by one in the steadiest way ever in this class.

今回、私たちのグループは、この授業で一番地道に、翻訳された単語を一つずつ分析しながら、一貫した研究をするために試行錯誤を続けました。(4年生メンバー)

Finally, we found so many results and considerations that we cannot tell entirely. Our project's research was complicated, but thanks to seniors, we succeeded.

最終的には、語り尽くせないほどの成果や考察が見つかりました。このプロジェクトの研究は込み入ってましたが、先輩方のおかげで成功することができました。

(3年生メンバー)

It was the first time I had made an elaborate presentation in a group, so I had a lot to learn and felt a sense of accomplishment.

グループでここまで手の入ったプレゼンをするのは初めてだったので、学ぶことが多く、達成感もありました。
(3年生メンバー)

これらの感想からわかるように、このような大掛かりな調査は時間がかかり、手間暇がかかる作業であるため、関心が高い学生たちでないと敬遠されがちである。またメンバーの考えを取りまとめながら、皆を引っ張っていくリーダーの負担も大きい。しかし、このように丁寧に精緻に原作と翻訳を比較対照させることによって、翻訳者が取った翻訳方略（ストラテジー）がどんなもので、どの程度の頻度で利用されているのかが明らかになる。自分たちが学んだ翻訳理論を自分たちの手で実証するという経験は、理論と実践を結びつけるうえで、一定の効果があったと考える。

5. 終わりに

日本の大学生を対象とした入門期の翻訳指導に関する考察について、理論と実践と結びつけるためのストラテジーとして、筆者の青山学院大学文学部英米文学科での指導例をベースに論考を展開してきた。前述のようにトランスレーション・スタディーズ自体が、英語を中心とする西洋の言語間での翻訳を中心として発展を遂げてきたという経緯がある。そのため日本語と英語間の翻訳に関する問題については、必ずしもストラテジーが役に立つとは言えないこともあり、理論だけを指導しても実践との乖離があるため、利用不可能と思われるがちである。しかし本当に不可能なのかどうかを検証するには、基礎的な実践例の集積が必要であるのは言うまでもない。今回、本稿で取り上げたのは主に翻訳入門や初心者を対象としたアクティビティである。これから先、学生たちがより上級レベルに進んで本格的に翻訳に取り組んでいく際に、これらのアクティビティがどのように影響を与えるのかについて、長期に渡る検証作業が必要であろう。

終わりに、今後の展望として述べておきたい点がある。現在の日本の大学のカリキュラム下では翻訳は通常、英語科目の枠組みに入っている。しかし、翻訳を行うには二言語両方に精通している必要がある。そのため日本語の文学作品を英語に翻訳する場合、英語の授業だけではカバーできない要素が大きい。国語の教材研究など、予め作品を理解するための作品を読む技術を習得しておく必要がある。それには英語科目の枠組みの中だけでは自ずと限界がある。今後は専門を横断したコラボレーションが可能となるようなカリキュラムの制度設定が求められる。

本稿は 2022 年 6 月 24 日（金）に開催された大東文化大学文学部英米文学科主催講演会での招待講演『通訳・翻訳の世界の不思議 - 言葉を「訳す」ことの難しさと楽しさ』の内容を基に追加・改訂したものである。

【注】

1. 一例として「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編 平成 30 年 7 月文部科学省 第 2 節 外国語科改訂の趣旨及び要点」を参照のこと。 https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf (2022 年 7 月 1 日アクセス)
2. Eugene A. Nida (1914-2011) アメリカ合衆国の言語学者。聖書翻訳に従事する。Formal Equivalence（形式的等価）と Dynamic Equivalence（動的等価）の概念を論じた。詳しくは著書“Toward a Science of Translating” (1964) を参照のこと。
3. ユーザーローカル テキストマイニングツールを使用。
<https://textmining.userlocal.jp/> (2022 年 7 月 11 日アクセス)
4. Lawrence Venuti (1953~) アメリカ合衆国の翻訳理論家。受容化と異質化という概念を用いて、翻訳者の透明性について論じている。詳しくは著書“The Translator's Invisibility: A History of Translation” (2008) を参照のこと。
5. Hans J. Vermeer (1930-2010) ドイツの言語学者、翻訳理論家。翻訳行為で最も重要なのは翻訳の目的 (skopos) と論じた。詳しくは Reiss との共著“Towards a General Theory of Translational Action -Skopos Theory Explained” (2013) や Chesterman (1998)などを参照のこと。
6. “The Great Passage – The complete TV series” (2017) Discotek Media.

【参考文献】

(洋書)

- Baker, M. (1992) *In Other Words : A Coursebook on Translation*. London and New York: Routledge.
- Chesterman, A. (1998) 'Hans J. Vermeer. A Skopos Theory of Translation: (Some Arguments For and Against)' *Target. International Journal of Translation Studies*, Volume 10, Issue 1, p. 155 – 159.
- Cintrão, P. H. (2010) 'Magnifying glasses modifying maps – A role for translation theory in introductory courses.' In Gile, D., Hansen, G., Pokorn K. N. (eds.) *Why Translation Studies Matters*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamin Publishing Company.
- Delisle, J. and Woodsworth, J. (eds.) (2012) *Translators through History* revised edition. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Gile, D. (2009) *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training* revised edition. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamin Publishing Company.
- Gonzalez-Davies, M. and Scott-Tennent, C. (2005) 'A Problem-Solving and Student-Centered Approach to the Translation of Cultural References' *Meta* 50 (1) :160-179.
- Miura S. (2017) *The Great Passage*. Translated by Juliet Winters Carpenter. Seattle: Amazon Crossing.
- Nida, E. (1964) *Toward a Science of Translating*. Leiden: E.J. Brill.

- Niimi, N. (1969) *GON, THE LITTLE FOX*. Translated by Mariko Shii Gharbi. New York: MUSEYON INC.
- Nohara, K. (2018) *Translating Popular Fiction Embracing Otherness in Japanese Translations*. Oxford, New York: Peter Lang.
- Pym, A. (2014) *Exploring Translation Theories* 2nd edition. New York: Routledge.
- Reiss, K., Nord, C., Vermeer, J. H. (2013) *Towards a General Theory of Translational Action -Skopos Theory Explained*. London: Routledge.
- Shultz, M.C. (2015) *Snoopy Comics Selection*. Translated by Shuntaro Tanigawa. Tokyo: Kadokawa.
- Toury, G. (2012) *Descriptive Translation Studies- and beyond* revised edition. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamin Publishing Company.
- Venuti, L. (2008) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London: Routledge.
- Yan, X.J., Pan, J., Wang, H. (2017) *Research on Translator and Interpreter Training A Collective Volume of Bibliometric Reviews and Empirical Studies on Learners*. Singapore, Springer.

(和書)

- 秋田喜美 (2017) 「外国語にもオノマトペはあるの？」窪田春夫 (編) オノマトペの謎ーピカチュウからモフモフまで 東京：岩波書店 p.65-84.
- 府川源一郎 (2000) 「ごんぎつね」をめぐる謎 子ども・文学・教科書 東京：教育出版株式会社
- 今井むつみ (2017) 「オノマトペはことばの発達に役に立つの？」窪田春夫 (編) オノマトペの謎ーピカチュウからモフモフまで 東京：岩波書店 p.103-119.
- 井上英明 (1990) 異文化時代の国語と国文学 東京：サイマル出版会
- カチャントニ・新井・アナスタシア (2022) 「昔話は日本の考え方や文化を知る方法だけど…」東洋経済オンライン <https://toyokeizai.net/articles/-/607899?page=3> (2022 年 8 月 18 日アクセス)
- 三浦しおん (2015) 舟を編む 東京：光文社
- 長沼美香子 (2008) 「アンケートに見る日本の翻訳研究の現状ー翻訳教育実態調査の集計と分析」『通訳翻訳研究』第 8 号 p.285-297. 日本通訳翻訳学会
- 中野清治 (2002) 「ジョークの中の人間模様」『高岡短期大学紀要』17, 139-148. 高岡短期大学
- 新美南吉 (2017) ごんぎつね 東京：偕成社文庫
- 阪本章子 (2013) 「大学・大学院の翻訳者養成コースにおける翻訳理論の位置づけ：英国・アイルランドでの調査結果」『通訳翻訳研究への招待』第 9 号 p.47-62. 日本通訳翻訳学会
- 田中深雪 (2018) 「初心者を対象とした大学の翻訳の授業 - 理論に基づいた実践への取り組み」『青山学院大学教育研究センター 2017 年度研究活動報告書』p.103-111. 青山学院大学教育研究センター
- 鶴田清司 (2020) なぜ「ごんぎつね」は定番教材になったのかー国語教師のための「ごんぎつね」入門ー 東京：明治図書出版